

30年後「鷹山」真松に

京丹波 祇園祭関係者が初植林



アカマツの苗木を埋め立て地の斜面に植える鷹山保存会のメンバーら(京丹波町猪鼻・瑞穂環境保全センター)

祇園祭の巡行に2022年に本格復帰した鷹山の頂上部に立てる「真松」を育てるため、初めての植林が9日、京丹波町猪鼻にある産業廃棄物の埋め立て地であった。鷹山保存会の関係者らが、30年後に高さ13メートルの真松にな

ることを願い、アカマツの苗木50本を1本ずつ植えた。

1966年ぶりに復興した鷹山は、製作した工務店の加工場が同時にあった縁で、京丹波森林組合から真松を提供してもらっている。ただ、町内でも松枯れ

被害による将来的な確保に懸念があり、植林することにした。

保存会が適地を探していたところ、産業廃棄物処理を手がける京都環境保全公社(京都市伏見区)の瑞穂環境保全センター内にある埋め立て地を使えるこ

とになった。

植林に先立ち、苗木を1〜2年ごとに植えていくなどとする協定を同社と結んだ。保存会の山田純司理事長(70)は「復活から植林まで京丹波町で縁が広がった。100歳まで生きて苗木が真松になるのを見届けたい」とあいさつ。鍋谷剛社長は隣接地に新たな処分場ができることを踏まえ、「2100年ごろまではこの土地をしっかり管理する。処分場をきれいな森に返していきたい」と話した。

保存会メンバーらは、獣害を避けるためネットで囲った斜面で、苗木を真つすぐ伸ばすため狭い間隔で穴に埋めていった。

(梶井進)